

本をきっかけに教育支援を目指す

釧路市 くしろブックシェアリング

新聞、テレビ、インターネット——。良いことも悪いことも膨大な情報が溢れる現代で、どれだけの人がそのニュースを自分のこととして真摯に受け止めようとしているだろうか。

「くしろブックシェアリング」は、釧路市内で家庭や企業・団体から無償提供された本を、クリーニング・補修して、学校の図書館や保育施設、福祉施設などに無償でプレゼントする活動を行っている。代表の阿部俊亮さん（29）は、「僕は手を上げただけです」と取材中何度も口にした。しかし、手を上げることすら躊躇する人が多い中で、阿部さんは自ら実践していく芯の強さを持っているように思える。

活動を始めたきっかけの一つに、当時よく目にしていた児童虐待のニュースがあったという。「以前から子供たちのために何かしたいと気にかけていたためにそうしたニュースが心の中に飛び込んできたのかもしれない。そんなニュースにふれるたびに、虐待されている子供たちに何もできない自分が許せず、何とかしたいという気持ちになりました」と阿部さん。

子供たちに何かできることはないかと模索する毎日。ヒントとなったのは「人生のポイントで常に助けられた」という「本」だった。

「学生時代にガンジーや上杉鷹山、吉田松

陰の伝記を読んで、生き方や言葉から大切なことを学びました。そして私自身も夢を持つことができました。自分を好きになるきっかけをくれたのも生きる道を示してくれたのも本なんです。でも本に触れられる子供とそれができない子供がいます。その格差を少しでも埋めて一人でも多くの子供たちに本にふれてほしいと思ったんです」

こうした思い入れのある「本」を媒体として親子の交流の場づくりをしようと、2009年（平成21年）10月、一人で活動を始めた。まず、母親がよく読み聞かせをしてくれたという実家にあった児童向けの本と、町内会会長にお願いして町内会で集めてもらった本を、市内の養護施設にクリスマスプレゼントとして渡したことから活動はスタートした。

それは新聞記事でも取り上げられ反響を呼んだ。こうした地道な活動や阿部さんの思いが共感を呼び、メディアに取り上げられることで活動が徐々に知られるようになったことから、少しずつメンバーや活動範囲が広がった。そして、道の教育局の働きかけもあって企業からの協賛金や釧路市からの助成金を得ることになり、2013年8月に活動拠点をオープンすることとなった。それと同時に名称を「ブックフォーチャイルド」から「くしろブックシェアリング」に変更した。これは教育局から同時期に札幌で同様の活動をしてい

たボランティア団体「北海道ブックシェアリング」を紹介され、団体間で本の提供をしあうなど、団体と連携を図る目的もある。

■ 手作り感あふれる活動拠点

活動拠点として、利用者が使いやすいように駐車場が多いことやボランティアの学生が利用しやすいように駅に近い利便性のある場所を条件に探していた。その条件を満たす元デパートで今は、衣料品店や食品を販売する商業施設「アベニュークシロ」の2階の一角を借りることになった。この場所は格安で借りることができたという。

スペースの入口は手書きで「ブックシェアリング」と書かれ、かわいらしい飾りつけがしつらわれた手作り感あふれる室内には、リサイクルショップで購入したり、もらったりしたテーブルやイス、ソファなどがおかれ、整然と本棚が並ぶ。

絵本や児童書など集まった本はそこに並べられ、利用者が本を選んでもちかえる。5冊までは無料でプレゼントしているが、それ以降は、本が不足しないように持参した本と引き換えになる。また、転売するのは禁止で「転売禁止」と書かれたシールを本に貼ることで古書店等の事業者に買わないよう呼びかけている。

現在は、大学生と社会人の計21人のボランティアスタッフがいるが、開館日は土曜日（10時から14時）のみで、その日にはスタッフ3～4人が、利用者の対応や本のクリーニング作業にあっている。

本の引き取りはオープン日に直接持参する

か、それ以外の平日は「ポスト君」と名づけた回収ボックスに投函してもらう。

引き取りのためにこれまで連絡があった場所まで1軒、1軒受け取りに行っていたが、本の状態が良くなかったり、ガソリン代がかかったりすることなどから、このシステムに変えたという。

「ポスト君を配置するようになってから、本の質が良くなりました。ここまでわざわざ持ってくるというのはやはり思い入れがあるからでしょうね」と阿部さん。

寄贈の呼びかけや活動をPRするために、地元のイベントにも積極的に参加し、ブログ、SNSの「フェイスブック」なども活用している。通常はひと月に100冊から200冊集まるが、新聞記事に活動の様子が掲載されたり、イベントでPRしたりした後は一度に100冊集まることもあるという。

利用者は2014年11月現在で約200人。利用するのは就学前の子供と母親が一緒の場合が多く一日平均5組ほど。多い時はママ友同士で一気に3～4組くることもあるという。利用者には会員カードを渡している。



親子連れなどで賑わっている活動拠点

クリーニングは、汚れている箇所をサンドペーパーやカッターで削ったり、1ページ1ページ念入りに拭いて行われる。筆者が訪れた日も、ボランティアスタッフが、「大事に読んでいた本だから、きれいにして次に読む人にもその思いを届けたい」と丁寧に作業していた。

このほかの活動として、小中学生の卒業や進級を機に不要になる本を寄贈してもらい、希望する後輩たちにプレゼントする「ブックタッチ運動」も始めている。この運動は、年度末に本の寄贈が増えることから企画され、2014年9月から釧路市や釧路町の小中学校に毎月100冊ずつ本を寄贈している。「ブックタッチ」という運動の名前は、「大切にしていた本を次の子供たちにつなぎたい」という阿部さんの思いから「バトンタッチ」にかけて名づけられた。



クリーニングはスタッフが1ページ、1ページ丁寧に拭いていく

■ 「塾を開いて学習支援したい」

学校や子供たちが集まる施設、子育て支援団体などへも寄贈しているが、そういう場面には学生スタッフを必ず連れていくようにしているという。

「学業とアルバイトなどプライベートな生活の時間を削ってまでボランティアで学生が来てくれる。こんなにありがたいことはありません。彼らがそういう場で、市長に会って話をしたり、メディアの取材に対応したりすることは、社会人になるとときには有益な経験になると思うんです。そういう彼らにとってプラスの団体でありたいので、それも活動の一つの柱としています」

今は、阿部さんもスタッフもそれぞれ学業や仕事を抱えているため活動したくてもできない状況だが、今後取り組みたいことは沢山あるという。

例えばイギリスで始まった「ブックスタート」という取り組み。これは、地域に生まれたすべての乳幼児とその保護者に、乳幼児健診などの機会を利用して、絵本などが入ったブックスタート・パックをプレゼントする活動だ。

さらに、大人向けの本は古書店がない地域や書店の少ない地域の集会場で販売したり、子供たちには無償でプレゼントしたりするなど収益につながる事業や、平日もオープンし、このスペースを利用して塾を開いて学習支援をすることなどもこれからの活動として計画している。

子供たちに勉強を教えることが好きで、学ぶことが楽しいということを伝えていきたいと語る阿部さん。「僕たちが取り組みたいのは、読書を推進することではなくその先にある教育です。ブックシェアリングはそのきっかけ

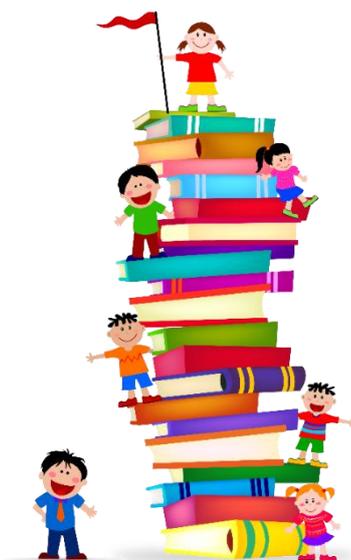
に過ぎません」



本の寄贈の際には必ず学生にも同行してもらうという

休みがない状況でもこうして精力的に活動し続ける阿部さんを支えているのは、やはり本から受けた教訓だった。マーク・トウェインの著書『人間とは何か』——「ずっと人のために生きていた思いをこの本で打ち砕かれました。結局は、人のためにと言っているけれども、自分のためにやっているとこの本が伝えてくれたことで、『ああ、そうだよな、自分が好きだからやっているんだよな』と吹っ切れたんです。でも自分の人生を使って人のことを考えながら生きることはかっこいいと思う。それが夢なんです」

取材中、「自分が好きでしていることなので」と何度も口にしていた。自分のためと口にしながらも人への思いやりに満ちた眼差しがとても印象的だった。



■ 連絡先
〒085-0017
釧路市幸町 14 丁目 1-9
アベニュークシロ 2 階
代表 阿部 俊亮 (あべ しゅんすけ)
TEL 090-9755-1057
Email : booksharing946@gmail.com
URL : <http://ameblo/kbs946>